

「ダイバーシティとジェンダー／セクシュアリティ」「ダイバーシティと SOGI／LGBT+」授業レポート

日付	2022年2月19日(土)【午前の部】
参加人数	133人
講義内容	講師：河野禎之(筑波大学人間系／DACセンター) 内容：ダイバーシティ・インクルージョンとジェンダー／セクシュアリティに関する基礎講義
作成者	YANG HANG
講義の概要	<p>人は「性」について、個人と社会両方の文脈において多大な影響を受ける。また、ワーク(仕事)とライフ(生活)は不可分で、その在り方も多様だが、両方とも充実した人生の実践は大きな課題である。多様な存在の1人として生き方を考える必要がある。</p> <p>そもそも、ワーク・ライフ・バランスの本質とは、個人一人ひとりが重要であるものを意識したうえで人生のバランスを保つことである。単にワークとライフの時間配分の問題と認識されがちであるが、ワークとライフが互いにその価値を高め合うようにマネジメントしていく視点が必要である。しかし、バランスは時にライフイベントによって崩れる。そして、そのライフイベントはジェンダー・バイアスによって不均衡にもたらされるという現実問題がある。</p> <p>ところで、以前より、就職や昇進をはじめ、あらゆる機会へのアクセス権について女性は疎外されてきた。そして、男性が外で働き、女性が家庭内でのケアを担うといった「伝統的な」性別役割分業が再生産されたが、ここに少子高齢化の進行が重なることで、労働力不足が生じた。加えて、日本では男性の長時間労働がデフォルトとなっているが、そのような労働環境において女性が家事や育児、介護などの生活面における負担を抱えながら男性と長時間労働をすることは困難があり、男性も、家事や育児・介護といった生活面に主体的に関わることから疎外されている。以上、女性差別撤廃と少子高齢化という社会背景、そして長時間労働という働き方をめぐる問題があるため、男女共同参画が重要である。ダイバーシティ&インクルージョンの理念と効用を鑑み、単なる福利厚生でない、戦略的な経営の視点からワーク・ライフ・バランスの価値を見出すことが求められる。</p> <p>「性」をめぐって、人は「女性」と「男性」に大別されるが、実際にはそうではない。性自認や性的指向、身体的性や性表現、割り当てられた性といった要素からセクシュアリティが構成されており、それらの組み合わせは実に多様である。しかしながら、存在するにもかかわらず、社会における誤解や偏見が根強いために、カミングアウトをすることができず、不可視なものとされている状況にある。それぞれのセクシュアリティで根本的に困難が異なっているため、十把一絡げにしないことが求められる。性的指向と性自認の多様性を表現する SOGI は、すべての人を当事者として巻き込む言葉として注目が集まっている。</p> <p>近年、日本では、地方自治体での同性パートナー制度の導入や教育面での配慮など、支援体制が整えられつつあり、“エンパワメント”の視点を生かし、企業による「包摂」も行われている。また、筑波大学も独自に、LGBT 等に関する基本理念と対応ガイドラインを設計している。LGBTQ に対する支援において、「支援を受けるべき」「かわいいような」存在とみなすのではなく、誰もが「多様性」の一部だと捉え、「きめつけない」ことが重要である。</p>
講義全体の感想	<p>「性」について論じる際に、多様なセクシュアリティを無視することはあってはならず、男女二元論を前提とした社会を捉え直す必要性を再認識した。また、差別撤廃の本質は、「生き方の多様性」の尊重であるが、広く社会に浸透してしまっている意識を変革させるのは簡単ではないため、多くの人が納得する根拠となる理論等が重要であると強く感じた。</p>

「ダイバーシティとジェンダー／セクシュアリティ」「ダイバーシティと SOGI／LGBT+」授業レポート

日付	2022年2月19日(土)【午後の部】
参加人数	133人
講義内容	講師: 矢田 茜(株式会社 favary)、清水 あやこ(株式会社 HIKARI Lab) 内容: ゲーミフィケーションを用いたシナリオ理解
作成者	YANG HANG
講義の概要	<p>株式会社 favary の矢田氏によって、ノベルゲーム「問題のあるシェアハウス」が紹介された。このゲームは、シェアハウスの住み込みの管理人となった主人公(女性)が、住人それぞれと恋愛を重ねていくストーリーとなっている。清水氏の所属する株式会社 HIKARI Lab と合同で開発されたものであり、心を軽くするためのヒントが得られるよう、随所に工夫がなされている。今回の授業では、登場人物のうち、レズビアンであることをカミングアウトしている真野千夜子をメインに据えたオリジナルの番外編のシナリオとして、①同僚にゲイであることをカミングアウトされ、そのことに対する戸惑いや愚痴をバーでこぼす酔っぱらい男性との遭遇、②千夜子のファンであることを明かしながら、「LGBTの方って、すごく繊細な感性を持ってる…」「特別な存在」など、無意識の偏見(アンコンシャス・バイアス)に基づいた発言をしてしまう、シェアハウスの内覧に訪れた喜多村との会話、の2つを取り扱った。これらに関する映像の視聴後、同性愛者(かもしれない)と打ち明けられたらどうするか、いくつかのアンケート調査も行われた。「飲み会に同性愛者がいた場合どうするか、他の人が、恋愛や性に関して尋ねていたらどうするかなど、実際の場面を想定しての質問がいくつかなされ、受講生はゲームのシナリオを通して感じたことや午前の部で学んだ内容、自身の経験を踏まえながら回答を行った。</p> <p>ディスカッションでは様々な話題で盛り上がった。矢田氏は、メンタルを崩してしまった経験から、エンターテインメントを通して心を軽くし、楽に生きられるヒントを得られるようにしたいと考え、本事業への協力を企業等に仰いだが「ビジネスにならない」と断られてきたことを明かした。また、清水氏も、社会全体の差別意識の方に課題を感じており、売り込みに各企業を訪れた時にも導入を躊躇されたことが多かったと語った。これに関連して、社会モデルの概念が取り上げられ、差別が目の前で生じた時にその加害者を批判するケースが多いが、同時に、自分のこれまでのふるまいについて自省することもできるのではないかという話もなされた。問題の捉え方の視点や、商業主義の社会における社会正義のための変革の難しさについて触れることができたのであった。また、多様性を美化し消費することに対する批判もあるが、多様性に関する意識を芽生えさせるという点で、学校と教育の限界を補足する可能性があるかもしれないと語られた。ゲームシナリオが昨年度の講義を踏まえて改良されたように、日々情報をアップデートし、行動やサービスによって受け手に伝わるメッセージや姿勢について考えることが重要であるようだ。</p>
講義の感想	<p>ゲーミフィケーションを通じて、LGBTQを「いない」ものとする社会の前提意識が「当事者」を傷つける危険性が高いと痛感した。また、プライベートな話題で盛り上がることも多い酒の席という、学生も経験しうる場面設定は、受講生にとって想像しやすく予行演習としてふさわしいと感じた。さらに、ディスカッションを聞き、セクシュアリティの多様性について、セクシュアリティのあらゆる属性を説明するだけでなく、社会モデルとして差別構造を捉え直すように向かわせる営みが非常に重要であると考えた。</p>

「ダイバーシティとジェンダー／セクシュアリティ」「ダイバーシティと SOGI／LGBT+」授業レポート

日付	2022 年 2 月 20 日(日)【午前の部】
参加人数	133 人
講義内容	講師：松岡 宗嗣(一般社団法人 fair) 内容：「Ally(アライ)」であることとは
作成者	正木 僚
講義の概要	<p>松岡氏のライフストーリーから Ally や味方であることについて考えることが目指された。</p> <p>シスジェンダーのゲイ男性である松岡氏は、ジェンダー／セクシュアリティをめぐる社会規範のなかで、適切な情報やロールモデルとなる人がおらず、「ホモネタ」などのいじりにキャラとして対処するなどして学校生活を生き延びてきた。高校卒業以降、友人や母親にカミングアウトをし、度々ポジティブに受け止められたことによって救われるような気持ちになった一方で、「嘘をついていたのか」という言葉には罪悪感を覚えた。また、相談されないうまま自身のセクシュアリティを勝手に他者に告げられたこと(アウティング)に対して、カミングアウトの自由は個人の権利であると強く感じていると語る。</p> <p>大学進学後は、セクシュアリティをオープンにし、LGBTQ の団体で性の多様なあり方を実感しながら活動してきた。当事者スピーカーとして語ることで周囲の人間の意識が変わるを感じつつも、性的マイノリティ当事者の人間関係や環境などによって、個人の生きやすさが運命に委ねられており、それを変えるためにはセーフティネットとして法制度を整備する必要があることに気づき、現在はジェンダー／セクシュアリティに関する政策・法制度について情報発信を中心に行っている。</p> <p>ライフストーリーを振り返り、松岡氏は Ally については、特権性について考えることが重要だと指摘する。個人は複数の社会的アイデンティティを有しているため、それぞれについてのポジショナリティを省察することで自身のもつ特権に気づくことが可能である。特権に気づき、それを利用する形で差別や偏見をなくすための行動ができるため、誰もが誰かのアライになれるのではないかと考えているとのことである。また、「当事者」と「Ally」という二項対立の枠組みでなく、グラデーションで考えること、当事者の「声」を奪っていないかということを常に問うことも大切であると語った。そして何よりも、Ally であろうとする姿勢や行動をとることが最も重要であると締め括った。この点については、ハードルを下げることをねらって挑戦した、Ally であることを SNS で発信する取組みで感じた、Ally であることの発信が果たして信用するに足り得るのかという難しさや、ハラスメントが起きたときに、同調せず笑わないことや、その場でなくとも後からフォローを入れることなど、様々なレベルでの行動があると感じたというエピソードと関連するものであった。</p>
講義全体の感想	<p>松岡氏が自身のエピソードを交えながら姿勢と行動の重要性を示したことによって、Ally という存在が問われた。これにより、今までファッション感覚で Ally を名乗る人の存在により不信感を抱いてきた人も、これから誰かの味方でいたいと考える人も同じ土俵に立って、個人や社会のあり方を再考することができたのではないかと考える。また、セクハラに対する効果的なアプローチについて意見が共有されたが、私自身、ツール不足を感じていたため、非常に参考になった。今後 LGBTQ 関連の活動に挑戦してみたいというコメントも散見された。これらを受講生が Ally としての姿勢を見せようとしている様子と捉えられるのならば頼もしく感じると同時に、本講義の意義が十分に浸透したのだと推察する。</p>

「ダイバーシティとジェンダー／セクシュアリティ」「ダイバーシティと SOGI／LGBT+」授業レポート

日付	2022年2月20日(日)【午後の部】
参加人数	133人
講義内容	講師：前田邦博・ジャンジ・時枝 穂(プライドハウス東京) 内容：プライドハウス東京ー概況とトランスジェンダーへの取組みー
作成者	正木 僚
講義の概要	<p>スポーツイベントにおける LGBTQ+のセーフスペースとして開かれるようになったのが、プライドハウスである。東京 2020 を見越して 2018 年にキックアウトしたプライドハウス東京は、単に居場所として機能するだけでなく、①東京 2020 の公認プログラムの指定を受け、②コンソーシアム方式による運営の下、③情報発信やイベント開催をするなどの特徴を有している。スポーツの他、教育や文化、セクシュアルヘルスなど、7つの分野について多くのステークホルダーと協働し、活動の幅を広げている。2020年10月に常設の LGBTQ+センターとしてオープンして以降、延べ 3,450 人が来場しており、そのなかにはスタッフと話すなかで相談支援へとつながった人もいる。「心の拠り所」としての機能と、対面相談への「導入線」としての機能を果たしているのである。</p> <p>そのようなプライドハウス東京では、毎月第1・第3火曜日に(多様なトランスジェンダーが訪れることのできる)トランスデーを開設している。近年、トランスジェンダー(特にトランス女性)に対するヘイトが増え、新宿二丁目でもトランスジェンダーが安心できる居場所が少ないためである。開館時には、その前後にミーティングを開いてスタッフ間での確認を行い、トランスフラッグやトランスジェンダーに関わる内容が掲載されている書籍等を配置することで、来館しやすい雰囲気醸成に努めている。また、当事者限定の交流会企画を開催することもある。予算や人員の確保等の課題に直面しながらも、トランスジェンダー(かもしれないとアイデンティティが揺らいでいる人を含む)当事者やその家族が心の内を吐き出せる場として役割を果たしている。</p> <p>先述のとおり、トランスジェンダーはヘイトの標的になることが多いが、単に差別の意図を含む言葉が向けられるだけではない。職場のトイレ使用や競技会への参加が制限されたり、殺害されたりするなど、生きる上での障壁は非常に大きい。これら各々の問題に対し、声明を出したり、トイレの事例からインクルージョンのあり方を学ぶイベントを行ったりもしているのである。アライ(目指す人も含む)には、トランスジェンダーの人たちを孤立させるバッシングに対し、向き合うことが要請される。換言すれば、ジェンダー／セクシュアリティはすべての人がもつものであることを自覚し、そしてそのカテゴリー内もまた多様であることに目を向け、寄り添おうとする姿勢が重要である。</p> <p>3人の講師による講演の後に行われたディスカッションでは、本学キャンパス内のスーパーのトイレの設置をめぐる話や、2日間の講義内容を踏まえて知識をアップデートし続けていく営みに関しての話題で議論が白熱した。</p>
講義全体の感想	<p>様々な人や団体、企業や自治体の連携によって、個人では変え難い社会に対し立ち向かう手段が多様にもたらされる可能性を知り、励みになった。これまで、様々な団体などで活動されてきた方が想いを同じくしてプライドハウス東京に関わっているため、それぞれの視点や知見が日々の活動に反映されている。そうした活動の意義だけでなく、そのなかで見えてきた社会課題についても取り上げられたことは、団体の内部で活動することの少ない(と思われる)受講生にとって、貴重な機会になったと考える。</p>